

(9)1201 炉辺医話 2001.8.6 提出

感性

遺伝的性格と後天的修飾

読者の方も自分のことを考えてみたことがあるでしょう。筆者も当然、自分のことを考えて見たことがあります。一般には、自我に目覚めるということなのでしょうが、そんな難しいことではなく、自分が他の人にどう見られているのか、どう思われているのかということが、急に気になりだしたのが、50才を越えた十数年前のことだったと思います。自我に目覚めるのが思春期とすることが多いですから、超おくてだったというのでしょうか。それまで、患者さんや看護婦さんに、“優しい”といわれたことがあったので、そう思われているのかなと思っていましたが、自分では、そういわれるのは、実は、あんまり好きでなかったのです。昭和一桁生まれの日本男子として、“優しい”は、優柔不断の婉曲な表

現とも取られかねないという思いがあったからです。その代わり“温かい”といわれるのは好きでした。人の性格は、一面性だけでなく、元来の本性に、多面性をもつ仮面をかぶっているとされます。この仮面は、ペルソナと呼ばれ、person、personal、personalityなどの語源とされ、周囲の状況に応じて、かぶる仮面が異なり、多様な性格として表現されるといわれます。性格は、元来の遺伝を主とする生得的な本性が環境による影響を受けて後天的に修飾されるものといえることができます。いろいろな言い方があるようですが、生得的な本性は、全体の30%程度に表現されると考える人もいます。同じ環境でも、人によって違う精神・心理的反応が起きることは、日常的に理解されることです。個人的な本性が、仮面の選択に影響を及ぼすということです。

感性をキーワードとすると

外の環境に起こった変化を認識し、その変

化の自分に対する意味を評価判断し、自分の対応の仕方を決定する精神・心理的能力を感性と呼ぶことがあります。広い意味の芸術的インパクトに対する感性、宗教的経験に感動する感性、医療では、病める人に接したときに、なにか手伝えることがあれば手伝いたい、助けてあげたい、という心の反応なども感性といえます。

医療で、病人の英語表記は、patient ですが、patos（病める、ラテン語由来）と ent(の状態にある人、ギリシャ語由来)との合成語と記憶しています。病める人に心動かされる人は、homo（人類） patientes です。感性をキーワードとすると、芸術、宗教、医療などは、人としての心の動きとして共通の源をもっているといえます。

古代社会では、シャーマンといわれる人が、神のお告げを通して宗教と医療、ときには政治にもかかわりがありました。シャーマンのいる状況、あるいは、シャーマンの機能をシ

シャーマニズムといい、以前には、“古代的未開社会に特有”のといういいかたで蔑視したこともありました。現在では、その社会に特有ということで軽蔑の対象にならないとする考え方が広がっています。仮に、シャーマニズムが蔑視すべきものとしたら、現代社会においてもしばしば見られる新興宗教と、それに対する狂信的帰依はどう説明すべきでしょうか。新興宗教では、しきりに医療類似行為が行われて、それらが信者を獲得する手段にもなっていることが知られています。現在では確立された世界的な宗教の中にも、古くは奇跡と呼ばれるような医療類似行為が信者の支持を受けたことが記録されているものもあります。新興宗教だけが、蔑視されるべきという論理は通用しません。

科学という宗教

ニューサイエンスのグループの中には、現代は科学教に犯されていて、科学的といえ

すべて受け入れられ、非科学的といえ、すべてが排除の対象になるといっている人もいます。一方では、奇跡とは、それに対するその時代での科学的理解がないから成立するということという人がいます。考えてみれば、古くには奇跡といわれたものが、現代では奇跡ではないものが沢山あります。わたしは、下肢の閉塞性動脈硬化症の患者に LDL 吸着治療をして、その効果に、“先生、これは奇跡ですよ”といわれたことがあります。20 世紀の初めに、“われわれは、知らないことがいかに多くあるかに気づくべきだ”といった人がいます。21 世紀になっても、状況は変わっていないと考えます。科学が進歩すれば、分からないことがどんどんと増えるように思えるのです。

世界的にみた軍事的紛争は、国同士から、国のなかでの民族間の争いの形をとっていることが多いと指摘されています。その背景は、個々の民族が背負っている既成宗教の教える

ことの違いとも考えることができることも多いのです。“そんな宗教があるか”と思っても、それが現実というものです。わたしは、個人的見解ですが、人間、とくに医療関係者には、宗教心は必要と考えています。ここでいう宗教心とは、造物主に対する尊敬・畏敬の感性があるということです。アニミズム、昔の日本では、八百万の神（やおよろずのかみ）の存在を受け入れるのに近い考え方です。

感性の共鳴

この感性が、医療者と患者との間で共鳴するとき、治療の効果が最大限に発揮されるのです。Placebo 効果というのがあります。いわゆる偽薬を使用しても効果のであることをいいます。この placebo 効果も、心身医療では評価します。「この薬は、効かないかもしれないよ」というのと、「新しくでた特効薬だからよく効きますよ」といって患者にわたすのでは、効果が明らかに違うのは、多くの臨床医師の

実感と思います。

医療者と患者の感性の響き合いは、感性の属性としてのある種の振動数（波長）が同調することのように見えます。これを日本では、気の合う、気心の知れた間柄、というように表現してきまました。名医といわれる人は、多くの人に合う可変性振動数の感性を持った人なのではないでしょうか。古い表現ですが、役者（俳優ではだめなのです）や、政治家（政治屋ではだめ）になにか圧迫されるような存在感のある人がいます。カリスマ性の強い人といわれたりします。ときには、集団ヒステリーを導いたりします。最近（2001.7.18 現在）の小泉純一郎首相などもその状態でしょう。“わあ、すごいことをいう”と思って、家に帰ってみると、“なーんだ、つじつまの合わないことをいって”と思った経験はありませんか。どうも、これは気の世界の虜（とりこ）になっていたのです。NASA の研究員で、これを human energy field（人間のエネルギー

場) といった人がいます。わたしが、興味をもつ“気”の話です。